

歸心——或いは「歐州紀行」

井上詠^{ながむ}

私は旅行者であつたから、

人と人を繋ぐ網の目は見えなかつた。

(人はまた風景の一畫にしか過ぎぬものだ)

偶々降り立つた都市の夥しい看板が

時折私に理解出来る言語で話しかけたと云ふだけのことである。

私とその形象サイレの美しさに幾度眩目しようとして、

それが生きてゐなかつたことに變りはない。

(波打つ金髪の碧眼の、女の息がにほふアルファベット——)

だから、私の見た都市が生靈の墓地であつたとしても驚くに當らない。

私がたとへ其處を遊園地のごとく廻つたとしても——。

巴里。

夜の繪。

色彩のあとを常住影が追ふ街。

血を缺いた電燈の光りに腫上がるマチエール——。

それを瀟洒な都市と呼ぶ者は巴里に永住できる。

人間は日蔭に咲く癡呆の花。

女達は彼女自身の鏡のやうに美しく、

男は硝子の曇りに似た精神をもつてゐる。

舗道のカフェのテーブルの赤い灰皿の戯け心が、

巴里の白晝に似つかはしい。

倫敦。夕暮。

空に含まれたみづの量と茜色の追憶。

そこで私が仰いだ雲の低く、重苦しかつたこと！

亡靈の哭くビッグ・ベンの鐘と、どろどろと地を匍ふ驟雨。

碧い可憐な眼が煉瓦造りの建物から覗く都市で、

乳牛の遅しく美麗な丈高い女性と、

柔和な男達の群れるラマの國。

既に腐り始めた

正真正銘の思ひ遣りの果實。

ノッティンガム近郊、イーストウッドにこびりついた

D・H・ロオレンスの沈黙。

チウリップの庭に希望を咲かせ、

丘陵を漂ふ薄白い「時間」と、

(ホテルの窓に擴がる草地に二匹)

山羊の食んでゐた「永遠」——。

それらが皆私には美しすぎた。

(ロオレンスの闇は血のにほひで噎せてゐたといふのに。)

さうして「現實」を捜し、

藝術の索引をつくる人間の愚蒙を、

恰も私が知らなかつたとでもいふかのように——。

コーンウォールでは海が枯れた。

ペンザンス、ゼナー、セント・アイヴズに、

海を嗅いで蝟集した動物の住ひが

ウエハースのやうに竝ぶ土地。

昏い潮風に搖れる蟹サラダの肉の健康と

貧しい草に圍まれた人々の深い眠り。

温順な犬の、人間のやうな眼。

彼等も愛されて此の地で一生を了へる——

それに何の不服があらう、と。

ブルージュ。贋作。

ヴェネツィアの、巴里の、

詐りの舞臺でをどる人間と

露地の戸口の土産品が腥い色彩でにはふ街。

百姓のやうに屈託せぬ警官を押し除け

石疊に集る車。

セルロイドの中世。

ブリュッセル——屑籠。

汚れた數式の建築とベルギー・フランの換算に忙しい市。

小便小僧の小用とビジネスマンの商用の便宜に、

巴里の植民地の賑ひのなかに置かれたナイトメアのやうな痰壺。

三色のアイスクリームを舐める蠅の歡喜。

アムステルダム。休日。

ライデン。休日。

アンネ・フランクの亡霊とナチスの残黨が等しくベンチに眠る休日。

公園の薄暮に飛ぶシェパードと、

池に潜らうとする鳩の平和。

ヒッピーの、黒人の、女衞の、賣春買ひの日本人の休日。

ゴッホの耳は鋪道に落ち、

びくびくと動かうとして果さない。

浮世繪―彼の蒐集品の生ぐささ。

(私はさうして獨逸の工場に跳び込んだ)

コブレンツ。水。

ライン川は運河に似た下水路。モーゼルは鉛色の排水管。

公園の石疊に竝べられたチエスの駒のやうに、

巨大で汚れた強い西陽――。

明け方のライン川に噴霧の漂ふあひだ、

未だ獨逸は往昔の貌を被^かいてゐた。

午後の陽光のプリズムに碎かれた獨逸聯邦共和國は

生産の未來に暮^{かまはす}しい。

人間の腦に美しい青寫眞をちらつかせ、
刃物だ、刃物だと騒ぎ立てる聲が先驅する國。

ミュンヘン。「普請中」。

懐しい言葉で日本の文豪が呼んだ一國の滅亡。

何處の地も同じ運命に壓^おし拉^ひしがれ、

通行人は現像室に出没する技師。

百貨店の地下室で私語する滞貨が住民登録證を獲得した世紀。

その一部始終を觀察した畫家は

硝子の裏に無機質の野原を創つた——。

カンジンスキーの眼裏で、

再び熱を帯びた人間の光り。

インスブルクの安心。

(人の工夫はアルプスを消せない——)

三千數百米に届くロープウェイの快行も

岩礁の假面の疊峯のまへでは何ほどもない。

れろれろと裏返る喉から希望の泡が湧き立つとき

紅くれないと白の民族衣裳の乙女たちは

人の眼にしづんだ湖の平和を忘れない。

彼女等の白い頬と勁い腰部に支へられた

山國の安心。

維納は石の海。

化石の魚が賑ふひるまは、

高い尖塔の教會を廻つて文明の波が騒ぐ。

夜、

歐州は死んだ怪物。

(それはもう斷末魔の叫び聲も擧げない。)

フルトヴェングラーの髓を叩いた「英雄」の足音だけが

彼處の通り、此處の街路を過ぎる。

その死骸は重く、幻滅は深い。

しかし常に死化粧は映え—。

ヴェネチアの光り。

サン・マルコ寺院やすらぎの靜謐の採光。

其處に棲む鳩はみづと光りから成る幻の翼で空氣を擦る。

ヴェネチアで人は、

たましひが空を往く瞬間に出會ふ。

夕立は海の吐息に異らない。そして海は

人の眼のやうに碧い。

舌鯡、ロブスターの、白い卓布に載つたみづの形態。

物體は皆、清明のなかに浮ぶ質量。

ミラノ。

影のない日差し。

白い針のドゥオーモは、先夜の夢の當惑した白日。

フレスコの壁に剥がれた「時間」がぶら下がる都市で、

母親は風船の糸のやうに子供を引張る。

—「ふらんちえーすか!」

—「だびっで!」

太陽には骨がない。彼等には肉體がないから、

子供等はいつも

高い精神の空に昇らうとする。

フィレンツェ。墓地。

其處で生血を吸る自動車なめしがわの精力と骸なめしがわの群生地。

人間は陽に腐敗した店頭なめしがわの果實。

或いはショーウィンドウに貼りついた薄い脊のポスター——。

大理石の服を脱がうとするミケランジェロの肉體さへ

アルノ川の淫な砂床の

永遠の墓所に葬られる。

ポティチェルリの「春」と「ヴィーナスの誕生」——

それがいまさら何にならう、と。

羅馬。砂の都市。

人心の行き著いた騒音の容器。

フィアットの看板のやうに轟しく、

少年の頬で鳴る母親のグローヴの手のひら。

荒んだ肌に精神の歡喜を漲らせるティレニア海の濱邊で、

腹の出た女等が數物のやうな魚をぶら下げて通る——

のっぺりと開けた

地球の溜池を見ながら。

港町プリンディシ。

蠅の兇暴。

街路を行く少年は思ひ出したやうに看板を殴る。

成人した男は、慾望を叩き割らうとして空しい。

(女はゐない。)

人の居ない岸壁に

やうやく夕暮がとまる頃、

ギリシヤは遠い。

しかし、もっと遠いのは「イタリアの歌」。

「舟旅はたのしい奴隷」でいおにそすの海豚に乗り

あどりあ海を眠り抜けると はじける太陽

きらきらと船を漕げばこるふの島影

ばとらすは瞬く港」

アテネ。禿山。

砂上に生えた石造の古代都市。

「時間」の癡愚を満載し、夜つびいて唸る塵埃の自動車。

遺跡は過誤の創夷、風にひかる悔恨。

貧しいギリシヤには、

しかし無限の貧しい未来がある。

(若者等の黒い眼に

無遍在の青い海があるやうに——)

モスクワ空港。地蟲。

地面から掘出された黒色の殻の
陽に適さぬ孤獨な生物。

猜疑の眼のおほきな世界で、

いのちのあるものは鎧の寡黙を守る。

或いは我が身に憤怒して

絶望の針を刺す。

日本に戻ると

至る所に秋が落ちてゐた。

ブリキ板と看板の厚い都會のはざまで、

日本のくさぐさが黄昏の風に笑ふ。

夜陰にきいきい啼いてゐるのは

塵芥のやうな祖靈。

街を行く人々の顔に紫の死色が賑はふ都市——。

東京。
魁^{すだ}魁^まの郷里。